

社説

Cheerleader or watchdog?

科学ジャーナリストはチアリーダーか監視役か

Nature Vol. 459(1033)/25 June 2009

科学ジャーナリズムが危機にさらされている。科学者が差し伸べることのできる救いの手とは、いったい何なのか。

ジャーナリストには、研究成果の報道価値を見抜く鋭い知性が求められている。もちろん、研究者の名前を間違いなく表記することも大切だ。では科学者は、彼らジャーナリストにそれ以上のいったい何を期待すべきなのか。

「あまりない」と答える科学者もたぶんいる。科学者の間では、科学ジャーナリズムは広報サービスの一種であり、純粋に新たな科学的知見を一般市民に説明するために存在している、と考える傾向が強い。彼らは研究成果の記事を読んで満足し、新発見のワクワク感を伝える書き手の能力を少しは認めるであろうが、基本的に、彼らが記事の良し悪しを判断する基準は、書かれた内容が科学的に正確かどうかだけである。

一方で、科学ジャーナリズムは自分たちの味方だととらえる科学者もいる。核兵器の拡散、ES細胞、遺伝子組換え作物といった社会的議論が必要な科学関連テーマに関して、一般市民の理解を深める上で科学ジャーナリズムは有用だと考える。そして必然的に、自分たちの研究事業がうまく進んでいることを市民や政治家にアピールする際にその役に立つ、と考えている。

残念ながら、「科学を含めた公共の問題を、私利私欲を超えて公正かつ懐疑的立場に立って監視する」というジャーナリズムの深い価値を真に理解してくれる科学者は少数派だ。もちろん批判の声が届かないわけではない。例えばいかげん統計とか、進化に関する怪しげな主張に対して疑問を投げかける報道であれば、研究者は問題なく支持してくれるだろう。ところが、ずさんな動物実験の方法とか、気候変動に関する過大な主張、あるいは科学者の利益相反を批判する記事になると、そう簡単には賛同は得られない。しかし、この種の精査・考察は、研究事業全体の利益にかなうものである。科学に対する社会の信頼を勝ち取るには、科学を単に正確に伝えるだけでなく、科学の中身を吟味する必要があるからだ。このプロセスにおいて、ジャーナリストは極めて重要な一部分を担っている。

今日、ジャーナリズムの未来は限りなく不透明だ。読者、そして確実な収入源だった三行広告は、インターネットに移動しつつある。また、論文の無償公開という新しいビジ

ネスモデルによって、デンマークなど一部の市場が混乱・崩壊してしまった。

市場の縮小は、科学のような専門領域をもつジャーナリストにとって、特に悪材料になる。科学ジャーナリストには書くべき内容に関する深い知識と理解が必要であり、また、適切なコメントを求める取材先、つまり新知見の背景や事情を説明でき、的を射た批判のできる専門家を把握していなければならない。ところが出版社は、予算を十分に確保できないとき、こうした専門性をぜいたく品と考える傾向が強い。プレスリリースや通信社の配信記事によって同じ誌面を埋められる場合、この傾向はさらに顕著となる。

現在のような人員削減の流れを止めるために、科学者はほとんど何もできない。しかし、こうした憂き目にあつたジャーナリストと協働し、監視と知識に裏打ちされた科学ジャーナリズムを存続させるための行動をとることは、必ずや価値があるはずだ。今後、徹底した科学報道メディアとか、あるいは新しいタイプの解説メディアといった新規のビジネスモデルに移行することも想定され、それは社会貢献ないしは慈善事業のようなものになる可能性もある。もしそうであれば、科学ジャーナリズムはそこに組み込まれることになるだろう。科学者が健全な科学ジャーナリズムの存続に積極的に関心を示すのであれば、この流れは加速されるはずだ。今こうした努力をしておけば、少なくとも厳しい結末を遅らせることはできるかもしれない。上位100社リスト、声高なキャスター、コロコロ変わる視聴者の関心……、未来のマスメディアの悲惨な状況が目に見えてくる。

こうした混乱の中でも、知識に裏付けられた正確な科学報道がきちんと続くよう、科学者は裏から支えることができる。まずは、科学の経験が全くないレポーターと話をする機会が今後増えていくことを覚悟すべきである。カリフォルニア大学バークレー校（米国）のBrad DeLongとSusan Raskyが大学教員向けに執筆したアドバイス(<http://tinyurl.com/nljleo>)に目を通すとよい。また、締め切りに追われるジャーナリストが、記事のテーマを理解するために必要な専門家を見つけられるよう、科学系の学会や協会は一層の努力を払うべきである。

将来的な課題として、科学者コミュニティは、ジャーナリスト養成学校や専門学会と力を合わせて、科学とは何かという基本テーマや、実験・審査・論文掲載という現実のプロセスを教える教程を、ジャーナリスト養成プログラムに組み込ませるよう努力すべきである。

科学とジャーナリズムは異なる文化と思われがちだが、実はそうではない。両者は同じ考え方を基盤に置いている。

ともに結論を導き出すために証拠を必要とし、その証拠は万人に公開され、また、すべての事柄に疑問の声を発する自由をもっている。しかも、科学者とジャーナリストは、ともにプロの懐疑主義者なのだ。一方は実験に関心に向け、もう一方はニュースや新知見に関心に向けているが、互いにその批判的視点を高く評価することができるからだ。
(菊川要 訳) ■